



〒663 西宮市池開町6-46
武庫川女子大学言語文化研究所
Tel 0798(45)3536 (直通)

おとなとしての

ことばづかい

中学生ぐらいになると、自分の母親のことを人に話すときに、「ママ」や「お母さん」ではなく、「母」と言うようになります。それは、ことばづかいについての意識がめざめてきた証拠といってよいでしょう。

それでは、もう少し大きくなった若者たちは、オトナとしてのことばづかいの意識を、どういうところで身につけるのでしょうか。それを知る手がかりとして、人間関係を限定して学生のことばづかいについての意識をアンケート調査で探ってみました。

【調査の内容】

次の4つ(A~D)の場面でそれぞれの相手に対して、下の①~⑮について気を使うことに○を付けてもらいました。(調査対象は武庫川女子大学・短大の国文学科の学生468名、調査時期は1995年5~6月)。

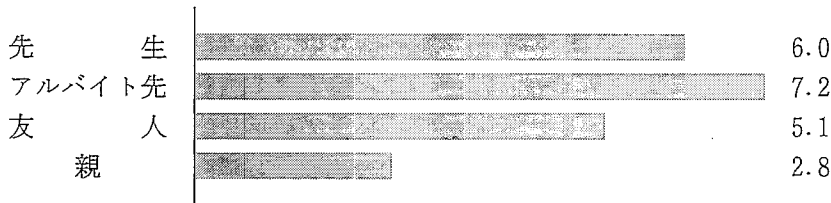
A 先生に対して B アルバイト先で C 友人に対して D 親に対して

- | | |
|--------------|------------|
| ① 女らしいことばづかい | ⑨ お世辞を言う |
| ② 愛想よく | ⑩ 話題の順序 |
| ③ 敬語の使い方 | ⑪ 動作をまじえる |
| ④ 声の大きさ・トーン | ⑫ 相手の目を見る |
| ⑤ ことばづかいを丁寧に | ⑬ あいづちを打つ |
| ⑥ 話すスピード | ⑭ おもしろおかしく |
| ⑦ あいさつをする | ⑮ 顔をうかがう |
| ⑧ 意味が通じるように | |

《だれに対して気を使っているか》

①～⑮のうち、より多くに〇が付けられた相手には、気を使っているといえる。それを比較すると次のようになる。数値は、1人当たりの〇をつけた数である。

図1. 場面別留意項目数の平均値



これを見る限りでは、アルバイト先で最も気を使っていることになる。なお、アルバイトをしていた学生は 374名 (回答者の79.9%) で、その内訳は、「接客業 240」、「その他 91」、「家庭教師と接客業 13」、「接客業とその他 13」で、ほとんどが接客業であった。したがって、ことばづかいについては、本人も気をつけるであろうし、店側でも注意や教育がなされていると推測される。また、友人に対する気の使い方の度合いが、親に対するよりはるかに大きいことが注目される。

《どんなことがらに気をつけるか》

次のリストは、気をつけると答えた人が多かった項目を順番に並べたものである。数値は、その項目に〇を付けた人の割合で、相手が異なる4つの場合の平均値である。

1. 意味が通じるように	57.0	9. 話すスピード	28.4
2. あいさつをする	55.5	10. 動作をまじえる	26.1
3. 相手の目を見る	53.5	11. 話題の順序	25.4
4. ことばづかいを丁寧に	49.4	12. おもしろおかしく	24.3
5. あいづちを打つ	48.2	13. 顔をうかがう	20.9
6. 敬語の使い方	43.0	14. 女らしいことばづかい	7.6
7. 愛想よく	43.0	15. お世辞を言う	4.7
8. 声の大きさ・トーン	38.9		

「意味が通じるように」が6割近い場面で留意されていることを示している。また、「あいさつをする」「相手の目を見る」が半分以上、「ことばづかいを丁寧に」「あいづちを打つ」がほぼ半分ということになっている。これらが、ことばづかいで大事な要素と考えられているとみてよいだろう。

このなかでは、「目を見る」が注目される。日本では、これまで話し相手の「目を見る」ことは、目上の場合にはやや失礼と考えられ避けられる傾向にあった。それから考えると、これは、欧米風に近づいてきた結果といえるかもしれない。

《相手によって変わるか》

次に、相手によって気をつける内容が違うのかどうかを調べてみよう。4つの場合のそれぞれ留意する人数の比率を調べてみる。相手ごとに比率の多いものから並べる。ただし、その比率の数値の多少をも直感できるように、上下の位置に配慮して図表化した。それが次の図2である（比率が40%を超えるものだけを示した）。

図2. 相手別の留意項目の多さ

A 先生に対して		B アルバイト先で		C 友人に対して		D 親に対して	
丁寧に	92.9	丁寧に	92.0				
敬語	90.8	愛想よく	85.3				
		敬語	78.6				
		あいさつ	78.1	あいづち	77.1		
あいさつ	71.8	声の大きさ	74.1				
目を見る	63.2						
意味	62.2	意味	60.2				
		目を見る	58.3	目を見る	58.8		
				おもしろく	58.5		
				意味	57.7		
				あいさつ	51.7		
		スピード	48.4	動作	49.1	意味	48.1
あいづち	42.9	あいづち	42.2	愛想よく	43.6		

先生に対しては、90%以上が「敬語」を使って「丁寧に」話すことに気を使っている。それに「あいさつ」が70%程度で続いている。

アルバイト先でも、90%以上が「丁寧に」、80%近くが「敬語」を使って話すようにしている。そして、アルバイト先での特徴は、85%を占める「愛想よく」であり、4人に3人以上が○をつけた「大きな声」できちんと「あいさつ」することのようだ。

友人に対しては、「あいづち」を打つが80%近いが、その後は「目を見る」「おもしろく」「意味が通じるように」が60%弱である。先生やアルバイト先とは、まったく異なった世界のようにだ。

そして、親の場合はさらに違って、40%以上の項目としては「意味が通じるように」しかない。しかも50%を切っている。これに続くものは、「目を見る」「あいづち」「おもしろく」で、項目としては友人の場合に似ているが、いずれも30%程度であり、比率としてはグッと少ない。

以上から、先生、アルバイト先、友人では、それぞれの相手にふさわしい項目を選択していることがわかる。そして、それに比べて、親にはことばづかいについて、あまり留意していない。つまり、場面や相手によって、ことばづかいで留意すべきことを明確に意識していることを示しているといえよう。

他方、図2で共通している項目をさがすと、「意味が通じるように」がある。これは、先生、アルバイト先、友人で、いずれも60%前後、親で50%弱の値をとっている。先に、ことばづかいで大事な要素と認識しているものとして、「意味が通じる」「あいさつ」「目を見る」「丁寧に」「あいづち」を挙げたが、なかでも、意味の問題は、相手によらずコミュニケーションの中心にあるとの認識を示していると思われる。

以上の結果を整理すると、次のようになる。

- (1) 「意味が通じる」ことを、ことばづかいの基本として認識している。
- (2) 「目を見る」ことを重要だと意識する割合がかなりあることが注目される。
- (3) 先生には、「敬語を使って丁寧に」が絶対的な留意項目である。
- (4) アルバイト先では、先生に対する態度に加うるに、「愛想よく、大きな声で」「あいさつする」が含まれる。
- (5) 友人には、「あいづちを打つ」ことが重要な項目となっている。
- (6) 親には、特に留意しない。

ことばづかいについての意識は、「先生、アルバイト先、友人」対「親」の間で強弱の対立が見られた。これは、ソト対ウチの意識の反映ととらえることができよう。各家庭において、ソトに対してことばづかいに気をつけなさいという教育がなされていることは容易に推測できる。

さらに、「先生、アルバイト先、友人」の3者の間では、「先生、アルバイト先」対「友人」という意識の強弱の差が見られる。友人は仲間との意識は強いだろうから、この事実もソトウチ意識反映の延長ととらえて矛盾はない。

したがって、ソト意識の強い場面である「先生」と「アルバイト先」が、学生たちにとって、ことばづかいを学ぶ場になっているのである。

ただし、データをよく見れば、「アルバイト先」のほうが「先生」より高い平均値(図1)を示し、よりバラエティにとんだ項目を選択していたし、より実生活に必要な項目を選んでいった。いわば、「先生」よりも「アルバイト先」のほうが、より強い教育の場になっているのである。

やや極論めかしていえば、学校教育よりもアルバイトという実習教育の場のほうが、学生のことばづかいの教育に貢献していることになる。ことばの教育にかかわる者としては、情けないことである。

あとがき ----- 1996. Feb.-----

やっと『LCりぽーと』第4号をお届けすることができました。

今回のテーマは、若者たちが、いつオトナのことばづかいを修得するのかという疑問が出発点でした。若者のことばづかいを批判する声はよく聞かれますが、批判する側のオトナに反省点はないのでしょうか。今回の調査では、まだくわしいことは解明できていませんが、オトナたちには、どうやら反省が必要だと思われます。

アンケートに協力してくれた学生の皆さん、ありがとうございました。

担当 言語文化研究所 佐竹秀雄・岸本千秋